多摩川の水害と万葉歌碑について

矢嶋仁吉

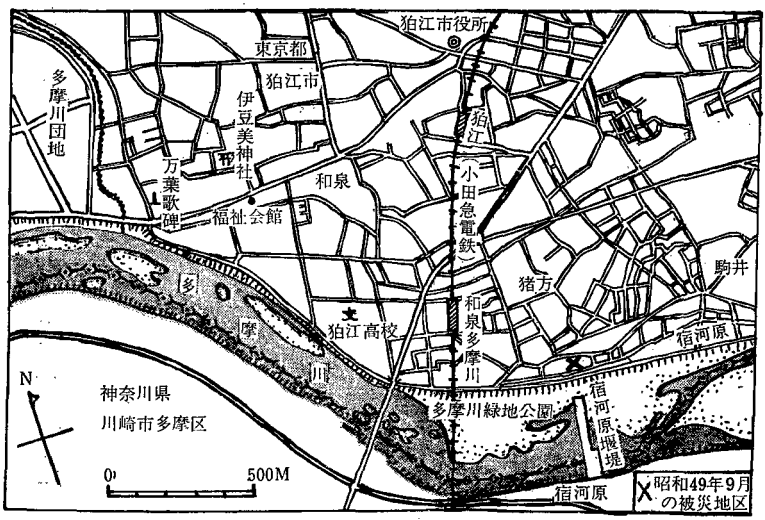
一、はじめに

昭和四十九年九月一日の台風十六号によってもたらされた集中豪雨のため、多摩川が氾濫して、東京都狛江市の猪方（いのかた）付近の堤防が決壊して、沿岸十九戸の民家が濁流に呑まれて流失した惨事は、なお世人の記憶に新たなことであろう。

その中には、多年にわたって粒々辛苦の結晶として漸く新築したばかりの家もあり、その他物心両方面への衝撃は大きなものがあったであろう。

被災された方々の悲しみもひとしおのことと推察し、心から復興の速やかならんことを祈るとともに、このような不測の災害の防止についての適切な施策の樹立をのぞみたい。

この被災地は小田急電鉄の和泉多摩川駅に近いところで、多摩川を登戸方面へ渡る鉄橋の手前のすぐ東方の堤防付近の新しい住宅造成地である。



第1図　研究地域付近略図

この災害については、既に各方面から(1)(2)の調査が進められ、災害の原因の究明や今後の施策の樹立に努力が重ねられている。公けの調査機関としての「多摩川災害調査技術委員会」の調査による最終報告書も、既に建設省に提出されたということが新聞紙上に報道されている。このような災害については、それが天災によるものか、人災であるかということは、各地の災害のたびに議論され、それが被災者への補償問題とも関連して微妙な問題をもっているが、厳正な科学的立場からの調査研究に基づく論議とともに、広い視野からの社会福祉の立場も考慮して円満な解決に至るように切望したい。

二、多摩川の流路と被災地の周辺

多摩川は関東山地の南部の山々に源を発し、山間部では丹波川と呼ばれて深い峡谷をうがち、激流をなしているが、山地の東麓の青梅市付近から流路をやや南東にかえて多摩川（玉川）といわれ、武蔵野台地と多摩丘陵の間を南

東流し、下流の河口近くでは六郷川とも呼ばれ、東京都大田区と川崎市との境をなして東京湾に注いでいる。

享保二十年（一七三五）に刊行された(3)田沢義章の「武蔵野地名考」には「玉河」と題して、

西の方、甲信二州の山中より、武州多波山の幽谷を流れ出で、橘樹郡羽田の浦のかたにて海に帰す、凡四十余里、矢口の渡しも此川のすゑなり

と記している。多摩川の水源や川の呼称については諸説があるが、文政八年（一八二五）上梓の(4)仲田惟善の「東都近郊図」の註記には

玉川　水源ハ甲州一ノ瀬ト云ヘル幽谷ヨリ出、武州秩父郡ノ山水落合多麻郡羽村辺迄ヲ多波川ト唱夫ヨリ下玉川ト云

とあり、弘化四年（一八四七）に刊行された(5)堀家愛政の「東都近郊のみちしるべ」の註記には

玉川　水源ハ甲州都留郡丹波山ニ発シ諸川会流シ武州秩父郡ニ至又諸川落合多麻郡羽村辺迄ヲ多波川ト云夫ヨリ下ヲ玉川ト云

とある。その他これと同様な説は江戸後期に刊行された武蔵野の(6)(7)(8)(9)地誌の記述や江戸近郊の(10)地図の註記などにもある。多摩川の水源は主として甲武の国境付近の山地にあって、途中日原川・平井川・秋川・浅川その他の水系と会して、武蔵野台地と多摩丘陵の間を南東流している。

多摩川と秋川との合流点あたりから漸く河道はゆるやかになり、広い洪涵地を形成しているが、とくに、その下流部では水路の蛇行が著しく、古来しばしば氾濫をくりかえした。

土木学会編の(11)「明治以前日本土木史」によると、多摩川の沿岸に堤防を築造しはじめたのは江戸時代初期で、その後、享保年間（一七一四―一七三五）に耕地開拓の必要上、府中付近で堤防をつくり、流路を正すなどして治水に力を用いたことが記されているが、中流以下の沿岸では度々の氾濫によって多きな炎害を蒙ったことがその他の諸

書に見えている。先年の被災地付近から下流の沿岸では殊に蛇行が著しく、堤防の決壊や流路の変化が著しかったのである。

徳川幕府も治水事業に力を注いだが、多摩川の中流以下の沿岸ではしばしば氾濫の厄に遭ったのである。明治以後土木技術の発達や治水政策の実施に伴って、江戸時代におけるほどの災害は減少したとはいえ、先年の水害の如き事態も皆無ではなかった。

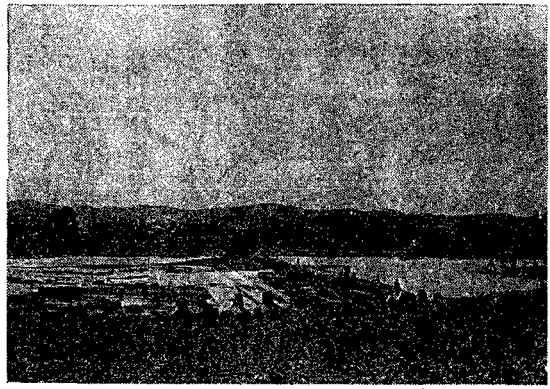


写真1　宿河原堰堤（中央は爆破地点）
（昭49.10.10筆者撮影）

この被災地の場合は、その対岸の神奈川県川崎市の宿河原地区から、あたかも多摩川の流路を遮断するかのように突出したコンクリートの「宿河原堰堤」という堰堤があって、平素はこの堰堤にはばまれた水は、堰堤の先端を迂回して狛江市猪方地区の側に細い流路を求めていた。

この堰堤は、昭和二十二年に現在の川崎市の水利組合が農業用水の止水堰として築造したものという。その後、水利組合は解散したが、その後もこの「宿河原堰堤」がそのまま残されていたことが災害を生じた基礎的要因であったことが、前述の多摩川災害調査技術委員会の報告となっているという。

先般の集中豪雨の時には、この堰堤によって増加した河水の捌け口が阻止されたため、激流が北岸の猪方地区に蛇行し、堤防をえぐって

写真2　玉川万葉歌碑
（昭49.10.10筆者撮影）

決壊し、その外側の住宅造成地まで濁流が侵入して、次ぎ次ぎに民家を洗い流していったのである。

このため、非常手段として宿河原堰堤の一部を爆破して堤防外にあふれた濁流を早く河道の方にかえすなどの対策を講じて、漸く災害の続発を食い止めることができたのである。

このように、多摩川は古来しばしば氾濫して災害をもたらすこともあったが、他方において流域の住民にとっては「母なる川」でもあった。この周辺の地では古くから手織りの布地を産し、古代に武蔵国より朝廷に奉った調の布の産地として知られた。現在でも多摩川の流域の各地に「調布」という地名の存在するのは古代の調としての手作りの布にゆかりの地として名づけられたものであろう。近世に玉川上水が開鑿されてからは江戸の上水の根幹となり、現在も多摩川の水は東京都民の上水道のおもな源となっている。

三、玉川万葉歌碑の由来と水害

前述の被災地の北西方約一・五キロの狛江市和泉の台地上に、いわゆる「玉川万葉歌碑」がある。

この碑は万葉集の東歌の一つで、多摩川にゆかりの深い調布にちなんだ歌を刻んだもので、正面には

「多麻河泊爾　左良須豆豆久利
左良左良爾　奈仁曾許能児乃
已許太可奈之伎　」

（註）（多麻川にさらすてづくりさらさらになにぞこの児のここだかなしき（万葉集巻十四））

と万葉仮名で記され、裏面にその建立の由来が刻まれてある。この碑は(12)(13)(14)(15)万葉集の研究者や歴史家や文学散歩の愛好家などがよく訪れるところであるが、その建立の由来をみると、古代以来、多摩川の周辺の人々の生活の一面を知り得るとともに、多摩川の過去の氾濫と決して無縁の存在ではないことが知られるのである。碑の裏面に記された文によると碑は最初、文化二年（一八〇五）に、江戸中後期の大政治家であり、且つ、学芸に深い理解をもっていた奥州白河の藩主松平定信（白河楽翁）に請うて正面の歌を揮毫してもらい、裏面に漢字で建立の由来を記したのであった。その撰文は白河藩の広瀬典、書は同藩の大家桂の手によるものであった。その撰に

請我老公書其古歌一首以勒樹之多麻郡猪方村

とあるように、はじめは昨秋水害のあった猪方の地に建立されたものである。ところが、文政十二年（一八二九）に多摩川の洪水によって堤防が決壊し、原碑は流失した。土地の人々は幾度か河床の発掘を行ったが遂に発見できなかったので、有志が碑の再建を企画し、大正十一年（一九二二）に、原碑の拓本を模刻して旧態に復するとともに、当代の大実業家であり、文化人として知られた渋沢栄一氏の援助を請い、再建の由来を同氏の撰ならびに書によって記したものである。文政十二年の水害で失われた原碑が猪方のどの辺にあったかは不明であるが、渋沢氏の撰文に、「堤壊決して之を失いしより今方に百年に及べり云々」とあるのをみると、原碑はその時決壊した多摩川の堤防上かある

いはそれに近いところに建てられたものではないかと推定される。

再建の碑が現在位置に定められたのは、碑を現在の和泉の伊豆美神社に奉納し、その境内に地を卜したものといわれているが、多摩川の現河床より約二十メートルほどの比高の台地上にあることは、水害への顧慮もあったことであろう。

原碑が建立された猪方付近の江戸時代の状況については、「新編武蔵風土記稿」の巻之百二十七、多摩郡之三十九、世田ケ谷領の猪ノ方村の条に

猪ノ方村　猪ノ方村は、郡の東南にあり、郷庄の唱へは伝へず、領は世田谷に属せり、江戸日本橋より行程五里、村の四境、東は岩戸村に境ひ、西は和泉村に接し、南は駒井村及び多磨川にそいたり、其あたりは橘樹郡宿河原村に交れり、北は覚東村なり、東西七町余、南北六町許、民戸四十二軒、地形平かに山林はなし、土性真土に野土交れり、陸田は六分水田は四分に居れり云々

とあるように、付近の村々にくらべると、比較的小さい平地の村落であったことが知られる。

その中に「其あたりは橘樹郡宿河原に交れり」とあるのは注意すべきことである。宿河原は現在は猪方地区の対岸の川崎市多摩区に属しているところが大部分であるが、猪方地区の東方の多摩川の北岸に接しても宿河原という集落が存在する。

多摩川をはさんでその両側に同一の地名の集落が存在するのは、かつてこの両地域は接続していたのが、洪水のため、河道が変り、その一部が北岸沿いに残されたことを示すものであろう。

これについては前掲書の巻之十六橘樹郡之四、宿河原村の条に、

宿河原村　宿河原村は郡の北界多磨川の南の涯にて二子の渡より行程五里、村内に宿と云小名あり、此処昔開墾の村落なるに

や、もとより多磨川の河原なれば宿河原を以村名とするならん（中略）
今村忠左衛門が先祖某は元和寛永の頃駒井村より移りしと云、そのかみ駒井は地の続きし所なれば、当村も彼村の枝郷などにや、されば役帳（註＝北条家人所領役帳）にも駒井宿河原と高を結で記せしならん、又役帳に多磨川の北の村々を江戸の庄に属せし由記したるによれば、当所も昔は此川の北に有しや、川瀬の変遷は常なり、しかのみならず今の地形を見るに水中にかけ入て地を失ふ所多し、試に寛政年中の地図に照し見れば、其頃より今は水流そこはく北に移れり、旧流の跡は溜井の如くにして明かに見ゆ、僅二十年あまりの変革かくの如きときは、二百年前のこと思ひやるべし、されば昔は今の瀬より遙に南を流れしならんと覚ゆ、さてこそ川北の地と同く江戸には属せしなるべし、今は稲毛領に属して郷庄の唱は失せり、戸数百三十六煙、村内に散在せり云々

と記載してある。これをみると、先般の水害の被災地の猪方の東方の小集落の宿河原と、現在は多摩川の南岸沿いにある宿河原はかつては同一地域にあったのが、河道の変遷に伴って分離したものであることが推定されるのである。このように、多摩川はその下流では近世に各地で屈曲・乱流したり、堤防を決壊した例が少なくない。

前掲書の巻之六十一、橘樹郡之四の二子村の記述のなかで、「多摩川」の項を設け、渡船について対岸の荏原郡瀬田村との間の紛争について記述してある。それによると、多摩川がしばしば氾濫するので夏は船渡にし、冬は橋を架したこと、もともとこの船渡は二子村の持であったが、洪水のたびに両岸の崖が崩れ、流れが変って瀬田村の方へ入ったため、その境界争いが起り、天明八年（一七八八）の訴訟の結果、それより後は二子・瀬田両村より渡船を出すこととなったことが記載されてある。

このような事例は多摩川の沿岸の各地に見ることができるであろう。幾度か水害の歴史をくりかえしてきた地域である。

四、むすび

本稿は先年の多摩川の水害の被災地の周辺の推移を辿りつつ、歴史地理の立場から管見を述べたものであり、筆者の意図する武蔵野研究の覚え書きの一つにすぎない。全国的な視野からみれば多摩川の流れやその災害の歴史は、必ずしも大きなものとは言い得ないかも知れない。土木技術の水準が高められ、当事者の施策も進められている現在ではあるが、東京のような巨大都市の周辺では、最近の極端な都市化のため、住宅地が無秩序に拡大されたり、かつての河床の跡や池沼などを埋め立て、急速に住宅地を造成する傾向が少くない。

本稿はこのような地域の災害についての一端をのぞいたに過ぎないが、今後の宅地造成や開発には、当該地域の現状の把握とともに、歴史地理的な見方も必要であろうと思うのである。

参考文献

(1) 籠瀬良明（一九七五）　多摩川の悲劇　地理　二〇巻第四号
(2) 伊藤　等・森　茂（一九七五）多摩川決壊リポート　地理　第二〇巻第六号
(3) 田沢義章（一七三五）　武蔵野地名考
(4) 仲田惟善（一八二五）　東都近郊図
(5) 堀家愛政（一八四七）　東都近郊みちしるべ
(6) 昌平黌・地誌局撰（一八八四）新編武蔵風土記稿（内務省　地理局刊）
(7) 斎藤幸雄等著・長谷川雪旦画（一八三四）　江戸名所図会
(8) 小山田与清（一八三〇）　多磨河考（写本）
(9) 橘樹園徳雅（一八四二）　玉川泝源日記（一九七五　慶友社校訂版）

(10) 高木保継（一八四八） 増訂東都近郊全図
(11) 土木学会（一九三六） 明治以前日本土木史
(12) 野村八良（一九一七） 武蔵野の文学
(13) 土屋文明（一九五二） 新修万葉紀行
(14) 谷　馨（一九六四） 万葉東国紀行
(15) 桜井正信（一九六八） 文学と風土　武蔵野